Osaka Shoin Women's University Repository

夏目漱石論

『行人』についての一考察

小田乘子

一

『行人』は、大正元年十二月六日から翌二年十一月十五日まで『東京朝日新聞』『大阪朝日新聞』に連載された。連載中、胃潰瘍のため、同二年四月八日から九月十七日まで中断している。作品は、中断前の「友達」「兄」「帰ってから」と中断後の「塵労」の四章で成るが、中断を境に前後の主題が変わっているという指摘は数多い。江藤淳氏は、「塵労」の特に「Hさんの手紙」において、漱石は〈精神を焦がしている観念の吐露〉を展開し、それを重視したために構成は〈支離滅裂〉であると述べている。(注1) 又、他方では、二郎の位置を話者に限定せず〈生活者〉としても捉えることで全体を考え、この主題の変化の問題を論究する傾向も多く見られている。(注2)

本稿でも「塵労」に至らしめる何か、構成の失敗に繋がる原因を、前三章の二郎の位置に焦点を置いて考えてゆこうと思う。ただ、三角関係的な見地は避け、作品上の疑問点から展開を試み、それらを模索してみようとするものである。

二

「帰ってから」(二十)に、次のような箇所がある。(注3)

然し自分も既に一家を成して然るべき年輩だし、又小さい一軒の竈位は、現在の収入で何うか斯うか維持して行かれる地位なのだから、かねてから、左右いふ考へはちら〳〵と無頓着な自分の頭をさへ横切つたのである。

(同二十六)には〈其日自分が事務所から歸つて〉という文もある。これらから、二郎が〈事務所〉に通って、ある程度の収入を得る社会人であるということがわかる。以降の展開でもその様な社会的立場で二郎は設定されている。

Osaka Shoin Women's University Repository

その二郎が「友達」「兄」でどれだけの日数旅行をしていたかを、具体化して挙げてみると次のようになる。尚、箇条書きの冒頭には各章における連載回数を記すが、煩雑さを避けるため、この場のみ算用数字を用いる。又、※印のあるものは、日数がはっきり記されておらず表記より多い期間の可能性がある項である。

▽「友達」

1　〈自分は東海道を一息に京都迄來て、其處で四五日用足旁逗留してから、同じ大阪の地を踏む考へであ〉り、〈豫定の時日を京都で費した〉。少なくとも京都で四日は過ごしている。＝休暇が始まって四日。梅田に着き、岡田を訪ねるのも、京都での四日目と同日と考える。

5　岡田家二日目。〈岡田の通つてゐる石造の會社の周圍を好い加減に歩き廻〉るが、暑さに堪えきれず、又岡田の家に帰る。帰ってから、お兼と会話する。＝五日目。

8　岡田家三日目。佐野と会見する。浜寺の料理屋で岡田夫婦と共に四人で食事をする。＝六日目。

10※　〈自分は三澤の消息を待つて、猶二三日岡田の厄介になつた。（傍点筆者）〉

〈佐野には濱寺で一所に飯を食つた次の晩又會つた〉…二三日中の、一日目に当たる。＝七日目。

11※　〈翌朝自分は岡田と一所に家を出た〉…二三日中の、二日目に当たる。＝八日目。

12　〈三澤の便りは果して次の日の午後になつても來なかつた〉。腹立たしさから出発を決め、荷作りをしているところへ三沢からの手紙が着く。三沢の入院を知り、岡田の家を出て病院へ向かう。三沢と会った後、彼の泊まっていた宿に泊まる。…二三日中の三日目に当たる。＝九日目。

15　三沢を見舞う。〈兎も角ももう二三日居て病人の經過を見た上、何うとか爲やうと分別〉する。＝十日目。

16　隣の客の描写。〈ある時は宿で酒を飲んで、藝者を呼べと怒鳴つてゐた。×ある時は是も藝者が何か眞面目な話を持ち込んで來たのを〉どちらも二郎が眠ろうとする時のことで、別の日の夜であると考えられる。前者を十日目の晩と考えると後者はその翌日の晩となる。＝十一日目。

17　岡田から電話で妙な予言をされる。三沢は二郎に〈僕のためにゐて貰ふ必要はないから、何處かへ行くなら遠慮なく行つて呉れ〉と言う。＝十二日目。

18　〈岡田からの電話は掛つて來た時大に自分の好奇心を動搖させた〉が〈一晩經つと〉岡田にその内容を聞こうかという考えも面倒になり、そのまま放っておく。〈自分は依然として病院の門を潜つたり出たりした〉そんなある朝〈あの女〉を見る。岡田から電話があったのも朝だが、その後の展開がそれぞれ全く重ならないため、別日の朝と考える。

21　三沢と〈あの女〉との関係を聞く。〈あの女〉を初めて見た、その日の内の出来事である。＝十三日目。

22※　時日がはっきりしない。しかし（二十）に、〈あの室へ這入

Osaka Shoin Women's University Repository

つたんだ。君の歸つた後で〉という三沢の言がある。二郎が〈あの女〉を見た日と、〈あの女〉が三沢の病室の〈筋向ふ〉に入ったのは同日ということになる。（二十二）の描写は全てその病室においてのことなので、入った当日とは別日だが、日数が不明なので最少単位の一日を加算する。＝十四日目。

23※ 〈病院に行くたびに〉二郎は三沢から〈あの女〉の話を聞かされるが、（二十二）ではっきりしなかった期間中と重なる可能性があるので数えないこととする。

26※ 〈ある時自分は「あの女」の看護婦から（略）運勢早見なんとかいふ、玩具の占ひの本見た様なもの〉を借りて遊ぶ。これも前項と同様、（二十二）ではっきりしなかった期間中の可能性があるので数えないこととする。三沢に退院を勧める場面も同じ理由から数えない。

27 〈自分は其明日〉三沢に退院はもう勧めないと言いに行く。一方、三沢は退院を決めている。三沢は夜の急行で帰る。＝十五日目。

▽「兄」

1 〈三澤を送つた翌日又母と兄夫婦とを迎へるため同じ停車場に出掛なければならなかつた。〉＝十六日目。

6 兄・一郎の口から和歌の浦見物が発議される。そのきっかけは、大阪が暑いためである。〈實際其頃の大阪は暑かつた。（略）自分は夜通し扇風器を掛けてぶう〳〵鳴らしたため、（略）母から叱られた事さへあつた。〉夜通し扇風機をかけた日が、最低一日はあったことになる。よって一郎の発案は、大阪に到着して二日目以降と考えられる。先例と同様、最少単位の一日を用いる。＝十七日目。

8 〈自分達は其翌日の朝和歌山へ向けて立つ筈になつてゐた。×其前日〉とは、岡田から借りた金を返すため母に無心を頼む翌日である。（七）で〈立つ前に〉金を返したいと思っており、和歌の浦行きが決まってすぐに母親に頼んでいるととれる。岡田が訪ねてくるのも同日中となる。

10 〈翌日朝の汽車で立つた自分達は狭い列車のなかの食堂で晝飯を食つた。〉＝十八日目。

16 〈朝起きて〉一郎と〈東洋第一エレヴエーター〉に乗る。＝十九日目。

23 〈朝になつて自分は母と嫂を例の東洋第一エレヴエーターへ案内した。さうして昨日の様に山の上の猿に芋を遣つた。〉＝二十日目。

26 〈その明る朝は〉嫂・直と和歌山へ出掛ける日である。〈午過ぎ〉出発。（三十二）で、和歌の浦が暴風雨に包まれ帰ることができない状況と知る。やむなく一泊することになる。＝二十一日目。

39 〈翌日は昨日と打つて變つて〉晴れる。朝食後すぐに宿を出発。和歌の浦に帰ってくる。＝二十二日目。

41 〈自分達は其明る宵の急行で東京へ歸る事に極めてゐた。（略）大阪で中繼をする時間さへ惜んで、すぐ東京迄寢臺で通さうと

Osaka Shoin Women's University Repository

云ふのが母と兄の主張であった。〉「帰ってから」（一）で、その予定通り実行しているのがわかる。

▽「帰ってから」

1　和歌の浦から大阪へ戻り、寝台列車で東京へ向かう。車中一泊。＝二十三日目。

3　〈我々は斯うして東京へ歸つたのである。〉＝二十四日目。

この結果、二郎は少なくとも二十四日間の旅行をしていることがわかった。休暇も同期間かそれ以上ということになる。教師や学生であればともかく、事務所に通う社会人にこの長期休暇は無理がある。内田道雄氏は、二郎の職業が〈性質上×相当に自由の効く一面〉があるからと考えておられるが[注4]、果たしてそうだろうか。この旅行は最低で二十四日間なのである。日数がはっきりしない部分や、二郎の旅行計画の臨機応変さを考えると、いくら〈自由の効く一面〉を持つ職業にしてもおかしいと思わざるを得ない。参考に〈大阪のある保険會社〉（「友達」二）に勤めている岡田の場合を見てみよう。

母と兄夫婦の滞在日數は在外少いものであつた。先づ市内で二三日市外で二三日しめて一週間足らずで東京へ歸る豫定で出て來たらしかつた。（略）

斯うは云ふもの、岡田も、母の滞在中會社の方を丸で休んで、毎日案内ばかりして歩ける程の餘裕は無論なかつた。（「兄」五）

岡田は二郎の父の周旋でこの保険会社へ勤め出し、その約一年後にお兼と結婚している。結婚してから〈彼是もう五六年近くになる〉（「友達」四）と岡田本人が言っている。つまり、勤務して少なくとも六年を経ている。そんな岡田でも一週間足らずの休暇を得る余裕を持たない。すると二郎の場合はどう解釈すればよいか。作者は「友達」「兄」を書いている段階で、二郎の社会的地位を考えていなかったといえる。その裏付けとして、二郎の就職に関する箇所を追って考えてみよう。

二郎の就職を斡旋してくれた者は三沢であった。三沢は〈つい近頃父を失つた結果として、當然一家の主人に成り濟ましてゐた〉（「歸つてから」三十）最初三沢が指名されていた仕事口であったが、そんな背後の状況も手伝って、三沢は二郎に譲ったのである。又、〈職業の上ではふわ〳〵して浪人のやうに暮らしてゐるが〉（「塵労」二十四）結婚することが決まっていることなどから考えても、財産を譲り受けたためそのような状況が許されているといえる。つまり、二郎の就職は三沢の父が死んでからということになる。しかし、〈つい近頃〉父を亡くしたとあるだけなので二郎の勤務期間が定められない。この〈つい近頃〉がいつ頃なのかで、二点の疑問のどちらかに解答が得られる。〈つい近頃〉が長期旅行の後であれば、無職期の旅行だったということで、二十四日間でも不思議ではない。それが旅行より前であれば（長期休暇の事実を百歩譲って〈小さい一軒の竈位は、現在の収入で何うか斯うか維持して行かれる地位〉にも会得できる。ではこの〈つい近頃〉は推定できないだろうか。

三沢の父について記述があるのは「友達」（三十一）（三十三）の〈娘さん〉の話の中である。〈今から五六年前〉（同二十三）、三沢の父は知人の娘の結婚を世話したが、その娘は〈一年經つか經たないうち

Osaka Shoin Women's University Repository

に〉(同) 夫の家を出た。ところが複雑な事情から実家にも戻れず、三沢の家で預かることになった。その間彼女は三沢が外出する際必ず玄関まで送ってきた。その様子を〈父や母は苦い顔を〉(同三十三) して見ていた、というのである。娘は病気で死んでしまうが、今年はその〈三回忌〉(同) だという。ということは三年前、娘が健在中は三沢の父も健在だったといえる。〈現在の収入〉と〈地位〉を考慮に入れても、二郎の就職が三沢の父の死の後であるならば勤務期間は多くても三年ということになる。先の岡田と比べてみても、三年の勤務で二十四日の休暇はどう考えても不自然であり、この二郎の就職は付加的なものであったといえるのである。

以上の考察から、長期旅行と就職の必要は、作品の上でそれぞれ別の目的を持っているということができる。二郎の〝立場〟は全くそのために左右されている。しかし最初からその別々の目的が構想の中で存在していれば、二郎の〝立場〟はもっと整理されていたはずである。構成の中で何が起きたのだろうか。

三

制作初期の主題がわかれば、長期旅行での二郎における目的もわかる。しかし「岩波版」『漱石全集』[注5]には、日記は大正元年十月五日で断片は明治四十五年でそれぞれとぎれており、執筆中のものが全く無い。(書簡はそれまでの調子と変わらず書いている。日記、断片が全く無いという極端さが不思議ではある。)そこで手懸りの枠を少し広げてみよう。

大正三年一月七日から十二日まで、『東京朝日新聞』『大阪朝日新聞』に「素人と黒人」という評論が発表された。[注6]その構想の断片が明治四十四年に存在している。それは次のようなものである。

○黒人ノ仕事、(artノ保存) artノ lifeヲ長クスル。(自己ノ freedomト特色ヲ犧牲ニシテ) means, not end (略)

○Art　女ノ言語動作 (略)[注7]

この二項の内、後者は『行人』のテーマの一つと指摘されている。[注8]そこで、この二項に出てきた〈art〉の意味について、「素人と黒人」を参考に考えてみよう。

「素人と黒人」[注9]では、漱石の〈藝術觀乃至文藝觀〉が述べられている。この中で〈藝術〉は二通りの意味で使われている。一つめは、〈藝術の本體〉が〈自己には眞面目に表現の要求があるといふ事〉で構成されている〈藝術〉である。二つめは、〈在來の型や法則を土臺にして成立してゐる保守的の藝術〉所謂伝統芸能的な〈藝術〉である。漱石は後者の〈藝術〉において〈個人の自由は殆ど殺されてゐる〉としている。これは断片の〈自己ノ freedomト特色ヲ犧牲ニシテ〉と符合する。では、後者の意味の〈藝術〉を断片の〈art〉に当ててよいだろうか。それに疑問が残る。断片の二項目〈女ノ言語動作〉との関連がわからないということと、〈黒人ノ仕事〉を全く無視して当てているという二点である。他にも〈art〉に何らかの意味が含まれている可能性がある。〈黒人〉に着眼して検討してみる。

Osaka Shoin Women's University Repository

「素人と黒人」における〈黒人〉は芸術界でのそれを指している。しかしこの評論が芸術論であるからそのように適用しているだけで、漱石としては広い範囲で応用できる語のようである。一般に置き換えた時の〈黒人〉の説明を、次のように述べている。

黒人は第一人付が好い。愛想がある。氣が利いてゐる。交際上手で、相手を外さない。（略）いくら調べていくら研究しても、其の特色が人格の領分に切り込む事は殆どないのである。況して精神の核に觸れるなど、いふ深さは、夢にも豫期する事が出来ないのである。

そして〈黒人の特色〉は〈人間の本體や實質とは關係の少い上面丈を得意に徘徊してゐる〉とし、次のように言及する。

要するに黒人の誇りは單に技巧の二字に歸着して仕舞ふ。さうしてそんな技巧は大概の人が根氣よく丁稚奉公さへすれば雜作なく達せられるものであるといふ心持になる。上部丈の改良で事が濟むのだから、精神的教養よりも遙に容易である、容易であるから誰にでも達せられると云ふのである。（傍点筆者）

「art」という単語は「芸術」の他に「技巧」という訳を持つ。〈黒人ノ仕事、（artノ保存）〉と考え合わせると、〈黒人〉の〈技巧〉によって守られる伝統芸能的な〈藝術〉が〈art〉ということになる。漱石は、本来の意味を持った芸術（先述の二通りの〈藝術〉の内、前者）と、〈技巧〉によるそれを区別するため、断片に〈art〉と表記したと考えて良い。わざわざ区別していることからも、この〈art〉には〈技巧〉に比重が置かれているのである。すると〈女ノ言語動作〉は〈技巧〉だというふうに繋がってくる。（しかし「素人と黒人」の引用を読んでもわかるように、〈技巧〉を〈誇り〉とする〈黒人〉は女性に限られていない。これに関しては後ほど考察する。）もう一つ付け加えることがある。断片の〈means, not end〉についてである。『行人』の「塵労」（三十一）で、〈目的〉と〈方便〉にそれぞれ〈エンド×ミインズ〉とルビがふられている。そのままこの断片に当てると、「方便、目的ではない」ということになる。三段論法により〈女ノ言語動作〉は「方便」であって「目的（この場合なら作法等の目的だろうか）」ではない、と解釈できるのである。

以下を制作初期の主題と仮定して、次章から長期旅行での二郎における目的を具体化してみよう。

四

「友達」でまず登場する女性はお兼である。二郎は彼女を、岡田と結婚する前から知っている。彼女が結婚した当時、二郎は〈岡田も氣の毒だ、あんなものを大阪下り迄引つ張つて行くなんて。最う少し待つてゐれば己が相當なのを見付てやるのに〉（「友達」三）と悪口を言っている。しかし久しぶりに会った彼女は〈明瞭で落付いて、何處にも下卑た家庭に育つたといふ面影は見え〉（同）ず、〈眼の縁に愛嬌を漂よはせる所などは、自分の妹よりも品の良い許でなく、様子も幾分か立優つて見えた〉（同）のである。以前は気が付か

Osaka Shoin Women's University Repository

なかった様子に多少の動揺を感じ、同時にお兼への評価が百八十度変わっている。

お兼さんは薄化粧をして二人のお酌をした。時々は團扇を持つて自分を扇い呉呉れた。自分は其風が横顔に當るたびに、お兼さんの白粉の匂を微かに感じた。さうして夫が麥酒や山葵の香よりも人間らしい好い匂の様に思はれた。（同四）

これらのようなお兼の描写は〈技巧〉という域までに至っていない。単に既婚女性に見たある種の変化――〝夫〟や〝家庭〟の存在が背景にある、落ち着きや品性の類――に留まっている。〈女ノ言語動作〉なら、通常レベルと言っても良いだろう。

次に登場するのは〈あの女〉とその付添の〈美しい看護婦〉である。ここでは実際に姿を現わしている〈美しい看護婦〉に注目する。看護婦は〈器量の優れてゐる割合に義務を重んじ〉（「友達」二十二）ず、二郎もそれを認めている。「素人と黒人」での〈黒人の特色〉で述べられた、〈人各の領分に切り込む事は殆どなく〉、まして〈精神の核に觸れるなど、いふ深さ〉は全く無いという部分にこの看護婦は当て嵌まる。次の引用には〈美しい看護婦〉の〈技巧〉と、同性だけにそれに気が付いている三沢の看護婦、又〈美しい看護婦〉の怠慢を見聞きしても嫌悪の気持ちは起こらない（これは〈技巧〉の効果の一つといえる）男達が描かれている。

「あの女」の看護婦は依然として入口の柱に靠れて、わが膝を両手で抱いてゐる事が多かつた。此方の看護婦はそれを又器量を鼻へ掛けて、わざ〳〵あんな人の眼に着く所へ出るのだと評してゐた。自分は「まさか」と云つて辯護する事もあつた。けれども「あの女」と其美しい看護婦との關係は、冷淡さ加減の程度に於て、當初も其時もあまり變りがないやうに見えた。（略）三澤は（略）斯う主張しながらも彼は別に此看護婦を惡む様子はなかつた。自分ものこの女に對して左程厭な感じは有つてゐなかつた。醜い三澤の附添ひは「本間に器量の好いものは德やな」と云つた風の、自分達には變に響く言葉を使つて、二人を笑はせた。（「友達」二十五）

〈器量〉と〈技巧〉を巧妙に使う女――〈Art　女ノ言語動作〉はだんだんと深まりを見せる。

「兄」から登場する直の描写は大変綿密である。特に和歌山で一泊を余儀無くされた晩に二郎が見る直の〈言語動作〉には、裏に何らかの意図あるいは作意を含んでいるようにも受け取れる。いくつかの直の態度を見てゆく。（引用の傍点は全て筆者による）

①二郎は、一郎に頼まれた通り直の〈腹の中〉（「兄」二十五）を聞こうと、話を切り出そうとする。直は次のように答える。

「何よ用談があるつて。妾にそんな六づかしい事が分りやしないわ。それよりか向ふの御座敷の三味線でも聞いてた方が増しよ」（三十）

②二郎が依頼の本題に入ろうとする。

「自分の年なんかに、いくら冷淡でも構はないから、兄さんに丈はもう少し氣を付けて親切にして上げて下さい」

「妾そんなに兄さんに不親切に見えて。是でも出來る丈の事は兄さんに爲て上てる積よ。兄さん許ぢやないわ。貴方こだ

二郎は直に意向を尋ねる。

Osaka Shoin Women's University Repository

量を鼻へ掛けて　わさ〳〵あんな人の眼に着く所へ出るのだ

一妾そんなに兄さんに不親切に見えて　是でも出來る丈の事

は兄さんに爲て上てる積よ。兄さん許ぢやないわ。貴方にだつて左右でせう。ねえ二郎さん」(三十一)

③二郎が、自分の心を依頼の履行に忠実にさせようと、言葉に強調を入れる。

「兄さんの爲に、僕が先刻からあなたに頼んでゐる事を、姉さんは眞面目に聞いて下さらないから」

自分は恥づかしい心を抑へてわざと斯う云つた。すると嫂は變に淋しい笑ひ方をした。

「だつて夫や無理よ二郎さん。妾馬鹿で氣が付かないから、みんなから冷淡と思はれてゐるかも知れないけど、是で全く出來る丈の事を兄さんに對してしてゐる氣なんですもの。——妾や本當に腑拔なのよ。ことに近頃は魂の拔殼になつちまつたんだから」(略)

「宣御座んす。もう伺はないでも」と云つた嫂は、其言葉の終らないうちに涙をぽろ〳〵と落した。

「妾のやうな魂の拔殼はさぞ兄さんには御氣に入らないでせう。然し私は是で滿足です。是で澤山です。兄さんについて今迄何の不足を誰にも云つた事はない積です。其位の事は二郎さんも大抵見てゐて解りさうなもんだのに……」

泣きながら云ふ嫂の言葉は途切れ〳〵にしか聞こえなかつた。然し其途切れ〳〵の言葉が鋭い力をもつて自分の頭に應へた。(三十一)

④下女が、暴風雨で危険だから今夜は和歌山に泊まれと忠告する。

二郎は直に意向を尋ねる。

「姉さん何うします」

「何うしますつて、妾女だから何うして好いか解らないわ。若し貴方が歸ると仰しやれば、何んな危險があつたつて、妾一所に行くわ」

「行くのは構はないが、——困つたな。ぢや今夜は仕方がないから此處へ泊るとしますか」

「貴方が御泊りになれば妾も泊るより外に仕方がないわ。女一人で此暗いのにとても和歌の浦迄行く譯には行かないから」

(三十三)

一旦、ここまで区切ってまとめることにする。〈Art　女ノ言語動作〉という見地から、①から④に簡単な語を当てると次のようになる。

①回避。自分に不利な話題に入りそうな気配を察知するや、それを避けようとする。秋山公男氏は、〈聞きもしない先から拒絶の姿勢を見せるのは、「用談」の内味が純粋に二郎のものでないことを先刻承知しているからに他ならない〉[注34]と述べている。作品の中には直が〈承知〉しているという決定的箇所は無いのだが、可能性としては充分に考えられる。

②すりかえ。親切にしているはずなのは夫の一郎にばかりではない、二郎にもそのように接していると言うことで、二郎の気を弱らせる。この〈親切〉に関しては、二郎にそうだと認めさせるに至る駄目押しがある。それは後の問答に出てくる〈クッション〉(三十

Osaka Shoin Women's University Repository

二）の刺繍を、直が二郎のためにしてやった話なのであるが、この種の親切と夫に為すべきそれとは〈本質的に別物〉であり〈次元が異なる〉[注10]。しかし二郎はこの〈子供騙し的な「親切」〉[注11]で〈彼女が自分に親切であつたといふ事實を裏から認識〉（三十二）するのである。自分が現在、兄のために頼んでいる〈親切〉とは異質だと気付かぬまま、そう認識してしまうのは、正に〈技巧〉に填まったといえる。

③同情買い、泣き落とし。自分を〈魂の抜殻×腑抜け〉とし、立場が弱いことを印象付ける。その上、泣きながらも小さな開き直りを見せることで一層哀れみを増す。秋山氏は〈一見しおらしく装いながら、その実無言裡の夫への反抗である〉[注12]と読んでいるが、比重としては訴えそのものよりも、それによる哀れさの方が重い。又、同氏は女の涙は〈大抵は皆ギヤマン細工〉（三十二）だという〈経験のある或年長者〉（同）の言が〈言葉の上の智識に過ぎなかつた〉（同）こと、それが〈後続の「若輩な自分」に含まれるという事実〉[注13]に注目している。そして、直の涙によって起きた〈可憐に堪へないやうな氣〉（同）等の〈感懐〉は〈一種の逆説・反語として理解すべき〉[注14]であると述べている。つまりこの涙について、回想している「今」の二郎は否定しているのであるが、これについては後述する。

④責任転嫁。女であるという立場を利用して自分に決定権は無いとし、直接の責任を避ける。これについては、和歌山に帰ってすぐ、一郎に対面した時の描写も見てみよう。

「ぢや。無理に歸れば歸れたのね」

嫂は斯う云つて自分を顧みた。自分は彼女よりも寧ろ兄の方に向いた。

「いや到底も歸れなかつたんです。電車がだいち通じないんですもの」（四十）

このように、和歌山で一泊するという最終的決定を二郎がしたのだという予防線が張れるのである。

引き続き、直の〈言語動作〉を追ってみよう。

⑤暴風のために電気が切れてしまい、下女が灯を持ってくるまでの二郎と直の会話。

「居るんですか」

「居るわ貴方。人間ですもの。嘘だと思ふなら此處へ來て手で障つて御覧なさい」

自分は手搜りに搜り寄つて見たい氣がした。けれども夫程の度胸がなかつた。其うち彼女の坐つてゐる見當で女帶の擦れる音がした。

「姉さん何かしてゐるんですか」と聞いた。（略）

「先刻下女が浴衣を持つて來たから、着換えようと思つて、今帶を解いてゐる所です」と嫂が答へた。（三十五）

⑥自分は電氣燈がぱつと明るくなつた瞬間に嫂が、何時の間にか薄く化粧を施したといふ艶かしい事實を見て取つた。（三十六）

⑤⑥共に挑発的な態度である。女独特の〈技巧〉である。この後、二郎の気持ちは先の③の場合よりも濃いものになっている。

Osaka Shoin Women's University Repository

次は直の、和歌山での最後の〈技巧〉に当たる部分である。

⑦　「あら本當よ二郎さん。妾死ぬなら首を縊つたり咽喉を突いたり、そんな小刀細工をするのは嫌よ。大水に攫はれるとか、雷火に打たれるとか、猛烈で一息な死に方がしたいんですもの」

自分は小説などを夫程愛讀しない嫂から、始めて斯んなロマンチツクな言葉を聞いた。（略）

「本に出るか芝居で遣か知らないが、妾や眞劍にさう考へてるのよ。嘘だと思ふなら是から二人で和歌の浦へ行つて浪でも海嘯でも構はない、一所に飛び込んで御目に懸けませうか」（三十七）

⑦と同じような直の言葉は（三十八）でも繰り返されるが省略する。これらは〈一種の心中への誘い〉になっており、〈義弟の自覚以前に、一人の男性としての意識の深層にその刺激が作用〉する〈心理的誘惑・催眠術的効果〉である、という秋山氏の意見[注15]に賛成する。そしてこれはそっくり〈技巧〉に当て嵌まる。

以上、〈Art　女ノ言語動作〉に焦点を置くと様々な〈言語動作〉を読み取ることができた。ここで大切なことは、これらは全て二郎の目を通して読者に伝わっているということである。登場した三人の女性は二郎と接するのが後になる程（作品進行上）、〈技巧〉の度合も強まってくる。逆に考えれば、直の〈技巧〉を際立たせるため、前二人はそれぞれのように描かれたともいえる。当然ながらそのためには二郎が観察する時間が必要となる。その結果、あのような長期旅行になった。尚、〈技巧〉の描写において本題である直が登場するが「兄」からであることからも、「友達」は〝序章〟であったといえるのである。（但し二郎と三沢の間にあった感情の問題や、後に一郎の思考にも影響する〈娘さん〉の話等、他の点においても序の役割をしている。しかし問題の主旨が変わってくるのでここでは触れない）。小宮豊隆氏は「友達」について〈短篇として獨立〉しているとし、そのつもりでなければ〈『友達』のやうな、『行人』の主題とは直接關係のないものを、漱石が書く筈がない〉と述べている[注16]。木幡瑞枝氏も〈後で出てくる問題と関連した話が出ているが、どう見ても饒舌が長すぎる〉、〈「友達」の章は不可思議である〉として、この段階でのテーマの模索とそれによる構成の〈不整備〉を述べている[注17]。しかし、両氏とも「塵労」の印象が強すぎて、主題をそれ中心に絞ったためにそのように考えたのではないだろうか。特に小宮氏は〈Art　女ノ言語動作〉を〈『行人』のテーマの一つ〉と指摘した本人ながら先のように「友達」を〈關係のない〉と述べるのは、主題を考える際、その着眼を「塵労」から逆に辿ったからだと考えられる。

以上の考察より、二郎の旅行による制作上の目的は〈Art　女ノ言語動作〉に接するという経験であるといえる。そして立場は、その伝達者、話者である。そう定義してみると旅行中、即ち「友達」「兄」までの二郎の役割は落ち着くが、この方法は後の展開に失敗を生んだ。次の章からは〝二郎＝話者〟を念頭に、その失敗点を見てゆこうと思う。

一郎に対面した時の描写も見てみよう。

二郎の気持ちは先の③の場合よりも濃いものになっている。

Osaka Shoin Women's University Repository

害の念が、斯んな問題に迄付け纏はつてゐた。（同四十三）

これらに関しては〈「懺悔」の意志を持つ二郎は、明らかに当時の二郎から大きくへだたっている〉、〈成長した二郎〉[注18]であるという指摘は多い。又、このような二郎の〈罪障感〉[注19]は〈一郎の破滅を想定しなければ、意味がよく通らない〉という見解まで出されている。そういった効果も重要だが、ここではその一つ前の段階について考えたい。回想している現時点の述懐が、何故この箇所で必要になったのか、ということである。

先の引用は、二郎が兄の依頼を受けて直と和歌山へ行き帰ってきたその日、一郎が直の性質がわかったかどうかを二郎に問う場面である。一郎にとっては大切な会見であった。しかし肝心の二郎に、直の心がわかっただろうか。和歌山での直の〈技巧〉は前章で挙げた。それに対し、二郎の態度は観察者に徹していられたか。二郎の心境は〈今日嫂と一所に出て、滅多にない斯んな冒険を共にした嬉しさ〉（「兄」三十七）を感じ〈彼女から飜弄されつゝある様な心持〉（同三十八）がしながらもそれが〈愉快でならなかった〉（同）のである。そして結局は〈嫂の正體は全く解らな〉（同三十九）かった。これは直の〈技巧〉に塡まったといえる。宮本百合子氏はこの点に関して〈二郎の人間心理の洞察はここに止る〉とし、〈直のこの女としての機微にふれた心理の抑揚〉[注20]がここで終ってしまうのは〈漱石のリアリズムの一限界であると思ふ〉と述べている。安東璋二氏もこの宮本氏の意見を〈妥当〉[注21]とし、〈「リアリズムの一限界」は、二郎という語り手の限界である〉という。しかしここでの二郎は直

五

『行人』は、たいていの小説がそうであるように、文体は全て過去形で書かれており、回想体といえる。そしてほとんど語っている〝現在〟は意識されないので、読者はそのまま作品進行時の当人として読み進める。実際に、主観はその進行時の時点での知識や経過に基いて述べられている。しかし、話者が回想している〝現在〟の述懐が突如色濃く意識されて描かれている箇所があり、話者の現時点の状態・態度が仄めかされる。（引用の傍点は全て筆者による）

① 自分は此時の自分の心理状態を解剖して、今から顧みると、兄に調戯ふといふ程でもないが、多少彼を焦らす氣味でゐたのは慥であると自白せざるを得ない。尤も自分が何故それ程兄に對して大膽になり得たかは、我ながら解らない。恐らく嫂の態度が知らぬ間に自分に乘り移つてゐたものだらう。自分は今になつて、取り返す事も償ふ事も出來ない此態度を深く懺悔したいと思ふ。（「兄」四十二）

② 兄は其後一口も聞きもせず、又答へもしなかつた。二人斯うして默つてゐる間が、自分には非常な苦痛であつた。今考へると兄には、猶更の苦痛であつたに違ない。（同）

③ 今の自分は此純粹な一本調子に對して、相應の尊敬を拂ふ見地を具へてゐる積である。けれども人格の出來てゐなかつた當時の自分には、たゞ向の隙を見て事をするのが賢いのだといふ利

Osaka Shoin Women's University Repository

の〈技巧〉に塡まってはいるが、話者としての使命を帯びた本来の姿も継続させなければならないという交錯した状態なのである。話者としての二郎は〈客観者の冷静と妥当を持たねばならず、一種の無私性を要求される〉[注22]。よって、〈直の心理のこの明暗を追つて〉しまうと〈技巧〉に塡まったばかりでなく抜け出せなくなり、話者として立ち返ることができなくなる。〈語り手の限界〉[注23]というよりかは、話者として留まっておくべき一線であったと考えるべきである。

しかし、この交錯した状態で小説を進行させるのは不可能であった。〈技巧〉に塡まった以上、二郎は直側に着いている。この時点で、二郎は作品中の登場人物を平等な視点で見られなくなり、話者の視点が崩される。が、ここまでの人物構成も話者も突然変更はできない。そこで先の引用のように〝現在〟の話者が必要となるのである。〝現在〟の話者の〈懺悔〉について、〈「嫂の態度が知らぬ間に自分に乗り移つた」[注24]その結果、兄を見縊るに至った己れの愚昧さ加減に向けられている〉[注25]という秋山氏の指摘がある。これに賛成すると共に、この〈懺悔〉の提示によって視点の平等性を引き戻そうとしていることを付け加えたい。

しかし、この〝話者〟の修正はかえって墓穴だったかもしれない。というのは、作品中の二郎が登場人物として重きを置かれ始めることにある。言い方を変えると、先の修正後作品中の二郎と話者の二郎が分離するのである。次の引用を見てみよう。（引用の傍点は全て筆者による）

● 自分は今でも雨に叩かれたやうなお重の佛頂面を覺えてゐる。（「帰ってから」九）

● 其折自分は何を話てゐたか今慥に覺てゐない。（同二十一）

●彼が外出して歸ると、嫂が芳江を連れて、不斷の和服を持つて上がつて來るのが、其頃の習慣であつた。（同二十六）

●けれども書齋に入つた彼女が兄と差向ひで何んな談話をしたか、それは未だに知る事を得ない。（同三十四）

「帰ってから」は三十八回まであるが、右のように〝現在〟の話者を使って終始統一されている。では、話者の資格が無くなった（単なる登場人物となった）二郎は、新たにどのような位置を占めることになるのだろうか。

二郎は「帰ってから」においても、直についての報告を避け続ける。一郎の話ぶりが報告の催促に転化しそうになると、二郎は〈問題が例の嫂事件を再發させては大變だ〉（五）と思い、〈問題が其處へ流れ入る事を故意に防〉（同）いでいる。又、その後のお重との喧嘩では、二郎が大阪での役目（貞の結婚相手の様子を見てくるということ）を大して真面目に果たしていないことから話が拡大し、〈人を馬鹿に〉（九）している、〈兄妹に同情のない野蠻人〉（同）とまで評される。（十一）からは〈女景清の逸話〉（十三）の場面が始まる。ここでは父親の軽薄な態度が描かれる。そしてこれを踏まえて、一郎は二郎を〈少しも摯實の氣質がない〉（二十一）と詰り、〈お父さんの子だけあつて、世渡りは己より旨いかも知れないが、士人の交はりは出來ない男×輕薄兒〉（二十二）とまで言うのである。因に、一郎が〈二郎お前も矢つ張りお父さん流だよ〉（二十一）と言ってい

Osaka Shoin Women's University Repository

ることから、父親がどう位置しているか、その性質を振り返ってみる。

●父は生來交際好の上に、職業上の必要から、大分手廣く諸方へ出入りしていた。（十一）

● 父は交際家だけあつて、斯ういふ妙な話を澤山頭の中に仕舞つてゐた。（略）能くそれを臨機應變に運用した。（十三）

● 父の話方は無論滑稽を主にして、大事の眞面目な方を背景に引き込まして仕舞ふので、（同）

● 父には人に見られない一種剽輕な所があつた。或者は直な方だとも云ひ、或者は氣の置けない男だとも評した。（十六）

● 何しろ父が其男に賴まれて、快よく訪問を引受けたのも、多分持つて生まれた物數奇から來たのだろう（同）

● 父はわざと斯う云つて皆なを興がらせた。（同）

● 父は年の割に度胸の悪い男なので、（十八）

● 「己も仕方がないから、夫や大丈夫、僕が受け合ふ。本人に輕薄な所は些ともないと答へた」（十八）

● 「其處が凡ての懸合事の氣轉ですな。萬事左右遺れば双方の爲に何の位都合が好いか知れんです」（略）「實は今云つた通り最初はね、その位な事ぢや中々疑りが解けないんで、私も少々弱らせられました。夫を色々に光澤を付けたり、出鱈目を拵へたりして、とう〳〵女を納得させちまつたんですが、隨分骨が折れましたよ」と少し得意氣であつた。（十九）

本稿の第三章で「素人と黒人」に触れた際、〈技巧〉を〈誇り〉とする〈黒人〉は女性に限られていないということを述べた。又、その少し前には〈黒人〉の説明や〈特色〉の引用もしたので再度参照していただきたいが、まさに、この父親の性質は〈黒人〉のそれと合致する。和歌の浦で一郎が最初評したような〈正直な御父さん〉「兄」（十八）の姿はどこにも無い。よって〈お父さん流〉の二郎も〈黒人〉の部類なのである。これが、単なる登場人物としての二郎の位置であった。

ここで注目すべき点は、父親も二郎も男性であり、しかも一郎の血縁だということである。故に〈技巧〉の枠は、すでに〈女ノ言語動作〉を越えている。自然と対象範囲は人間全体に拡大されるのである。これは、一郎の悩みを深化させ、孤独を助長することにもなる。

以上をまとめてみると、展開上発生した失敗点は大きく二点挙げられる。一つは〈技巧〉を描こうとして話者である二郎がそれに塡まり、話者の分裂が生じたこと。もう一つは、その分裂のために初期の目的設定では解決できない新たな主題の必要を引き起こしたことである。

さらに、これらをどう処置したか見てみよう。〝新たな主題〟については本稿の趣旨と違うので触れないが、これが程度の差こそあれ、全ての人間の中に存在するということには注意しておきたい。それを小説として展開できるのはその問題点に気が着いた者、ここでは一郎である。従って主題の本拠地は、彼の中、彼の苦悩の中に置かれる。しかし先述の通り、二郎に話者の務めはできない。作品

Osaka Shoin Women's University Repository

進行時の二郎に観察の能力が無い以上、〝現在〟の二郎にも分析は不可能なのである。二郎が下宿という形で問題の渦中を離れるのも、ここに一因があると考えられる。本稿の初めの論点の一つ、二郎の就職は、これを小説上リアルにするための必然的な要素であった。

絶対的に必要である〝新たな主題〟の話者は、「塵労」を一読してもわかる通りHさんである。Hさんの活躍は（二十八）から、と後半に置かれているが、約半年の休載明けで〈読者の興味をふたたび小説の世界に連れ戻すための趣向〉や〈一郎がHさんと旅に出る中心部を導くための状況設定〉[注26]のためにそうなったのであり、仕方がなかったと考えるべきである。

再度、二郎について考察してみよう。この「塵労」前半、いわば準備期間に、二郎の最終的な位置を見ることができる。（引用の傍点は全て筆者による）

- けれども今自白すると腹の中は話の調子で示される程穏かなものでは決してなかつた。（二）
- 兄の機嫌買を子供のうちから知り拔いてゐる彼等にも、近頃の兄は不思議だつたのである。陰欝な彼の調子は、自分が下宿する前後から今日迄少しの晴間なく續いたのである。（十二）
- 然しそれは昔の兄であつた。今の彼を、たゞ我儘の二字で說明するのは餘りに單純過ぎた。（十五）
- 從つて自分の氣になるのは未來の兄であると同時に現在の兄であつた。久しく彼と會見の路を絶たれた自分は、其現在の兄に關する直接の知識を殆んど有たなかつた。（二十一）
- 自分は兄から今何う見られてゐるか、何う思はれてゐるか、それが知りたくつて仕方がなかつた。（二十二）

この文体からもわかるように、〝現在〟の話者は作品進行時の二郎と再び同化している。つまり、一郎を理解し自分の態度を〈懺悔〉する〝現在〟は無く、〈今〉と〈未來〉に不安を抱く〝当時〟のみなのである。これは、平等な視点を持つ話者として、又〝新たな主題〟を一郎を観察することで表出する代弁者としてHさんが設定されたため、二郎は表向きの話者でありながら、単なる登場人物の位置を余儀なくされるのである。二郎は、ここに至って〈一郎に対して終始忠実な観察者〉[注27]とはいえない。むしろ、心配している傍観者といった方が妥当である。

六

「塵労」に至らしめる何か、構成の失敗に繋がる原因は、結局前章で挙げた二つの失敗点に帰着した。再度確認することになるが、〈技巧〉に塡まったことで生じた話者の分裂と、そのために引き起こされた新たな主題の必要である。この二点に至る発端として、断片の〈Art　女ノ言語動作〉を挙げて論述を進めてきた。が、このように振り返ってみると、自身で進めてきた論ながらも一つの素朴な疑問が湧くのを禁じ得ない。というのは、〈技巧〉を作品として描こうとした時、作者は、話者がそれに塡まるとは予測できなかったのだろうかということである。この問いを解くには、作者がどの

Osaka Shoin Women's University Repository

ような姿勢で話者を設定しようとしたかを考えなければならない。

『彼岸過迄』の「結末」[注28]で、漱石は話者・敬太郎について次のように述べている。

敬太郎の冒険は物語に始まつて物語に終つた。彼の知らうとする世の中は最初遠くに見えた。近頃は眼の前に見える。けれども彼は遂に其中に這入つて、何事も演じ得ない門外漢に似てゐた。彼の役割は絶えず受話器を耳にして「世間」を聽く一種の探訪に過ぎなかつた。

そしてこれは〈經驗としては滑稽の意味以外に通用しない、たゞ自分に丈眞面目な、行動に過ぎなかつた〉。さらにその結果として、敬太郎の〈知識感情〉が〈鼓膜の働らきから來てゐる〉ことで終わったことを、〈彼に物足らない所で、同時に彼の仕合せな所〉としている。これは漱石自身、この作品を終えての感想と反省であると考えられる。

『行人』の中で、二郎を〈門外漢〉にさせないためには、登場人物らと関係を密接に置き、又、あらゆる事象を実際に経験させる必要がある。〈二郎が『行人』の世界の渦の中に捲き込まれる事が深く〉なること、それによって〈『行人』の世界に出て來る人間が、誰でも二郎に、思ふままの事を言って、それぞれ自分の自然な赤裸裸な姿を〉[注29]出すということは、話者の設定の際、作者があえて意図したものといえる。しかしこの試みに、作者が何の危惧も抱いていないわけではなかった。これについては安東氏の指摘があるが、その前に次の書簡を見てみよう。これは大正元年十二月一日、中村翁宛のものからの引用である。

實は昨三十日夜漸く一回認め社へむけ發送致置候氣も乘らず自信もなく如何にも書きにくゝ候是が百回以上になるかと思ふと少々恐ろしく候（略）

返す〳〵御心配のみかけ御氣の毒に候是と申すも小生の創作に對する興味やら考やら強ひて複雑なものを鮮やかにまとめんとする無駄骨折やさうして最後に來る面倒くさゝやらがかたまつたものと御勘辨願度候[注30]

この書簡から安東氏は次のように述べる。

「小生の創作に対する興味や考」や「強いて複雑なものを鮮やかにまとめんとする」という言い方には、語り手であり、劇の主要性格でもある二郎の設定についての実験的な意図と不安が示唆されるように思われる。[注31]

この指摘は妥当であるといえよう。但し、この〈不安〉は『彼岸過迄』での話者の反省を『行人』で克服できるかという点であって、話者が〈技巧〉に塡まらないかという不安ではない。何故なら、〈無駄骨折〉という思いがあっても〈複雑なものを鮮やかにまとめ〉ようという意志があるからである。つまり、本稿で作品初期の目的として挙げた〈Art　女ノ言語動作〉と、『行人』における話者設定の方法は、同じ舞台の上で両立させようとした要素であった。

しかしそれは両立できるものではなかった。話者の反省を克服しようとしたがゆえに、〈技巧〉に塡まってしまったのである。〈Art　女ノ言語動作〉を描くのならば、この作品は一人称ではなく、三

Osaka Shoin Women's University Repository

人称で書かれなければならなかったといえる。

このために、後の展開や主題まで影響したのだから、作品構成としては明らかに失敗である。が、『行人』は決して〝失敗作〟ではない。

行人の原稿などは人の事にあらず自分の義務としてもまづ第一に何とか片付べきを矢張まだ書き終らざるにてもしか御承知願上度候勿論社會とも家族とも誰とも直接には關係なき事柄故他人から見れば馬鹿もしくは氣狂に候へども小生の生活には是非共必要に候。(注32)

「塵労」の執筆に取りかかった頃のこの書簡では、『行人』がどれだけ漱石の中に食い込んだ存在になっているかがわかる。又、「塵労」を脱稿した頃には〈私は今道に入らうと心掛けてゐます〉(注33)という心境にまで達している。『行人』は、作家としての漱石を深化させた一因といえるのである。そしてそこには、先述の失敗から生まれた〝新たな主題〟が一役買っている。

こうしてみると、作品構成の失敗は全体から見れば成長過程のようなものである。作家の深化を促したという点では、『行人』は大きな意味を持った作品であった。

注

(1) 江藤淳『決定版夏目漱石』(新潮社　昭49・11・25) 106頁

(2) 熊坂敦子「『行人』の世界」(「日本女子大学国語国文学論究」昭46・2 377頁で、越智治雄氏の指摘から〈実際に二郎は、生活者としての実体をあらわに示した存在なのである。〉と、「生活者」という味方を肯定している。本稿もこれに拠った。

(3) 本文からの引用は『漱石全集』第五巻(岩波書店　昭41・4・23)に拠った。ルビは全て省略した。又、各章の題名は新字体とし、各章中の回数は丸括弧で記した。

(4) 内田道雄「『行人』の語り手と聴き手」(「古典と現代」平元・9　古典と現代の会)但し本稿は『漱石作品論集成』第九巻(平3・2・10浅田隆・戸田民子編　桜楓社) 257頁に拠った。

(5) 『漱石全集』第十三巻(岩波書店　昭41・11・23)

(6) 『漱石全集』第十一巻(岩波書店　昭41・10・24)ではその掲載が『東京朝日新聞』しか挙げられていない。ここでは、荒正人『増補改訂漱石研究年表』(集英社　昭59・6・20) 765頁に拠った。

(7) 注(5)参照、690・691頁

(8) 同右、909頁

(9) 『漱石全集』第十一巻(岩波書店　昭41・10・24)「素人と黒人」の引用は全てこの本文に拠った。

(10) 秋山公男『漱石文学論考——後期作品の方法と構造——』(桜楓社　昭62・11・10) 116頁

(11) 同右　同頁

(12) 同右　114頁

Osaka Shoin Women's University Repository

(13) 同右　115頁
(14) 同右　同頁
(15) 同右　117頁
(16) 注（3）参照　781頁
(17) 木幡瑞枝「背後の手記――『行人』管見――」（「実践文学」22号　昭39・7・15実践文学会）39頁
(18) 佐藤勝「作家の論理と小説の論理――『行人』論」（「国文学」昭51・11学燈社）94・95頁
(19) 安東璋二「『行人』の世界（Ⅱ）極北の自我――漱石私論（五）――」（「人文論究」35号　昭50・2・28北海道教育大学函館人文学会）2頁
(20) 宮本百合子「『行人』について」（「新潮」昭15・6・1新潮社）48頁
(21) 安東璋二「『行人』の世界　その挫折の意味」（「人文論究」昭48・3　北海道教育大学函館人文学会）但し本稿では『漱石作品論集成』第九巻（平3・2・10浅田隆・戸田民子編　桜楓社）138頁に拠った。
(22) 注（19）参照　3頁
(23) 注（20）参照　同頁
(24) 注（21）参照　同頁
(25) 注（10）参照　121頁　尚、文中の本文部は新字体にされていたので、そのまま引用した。
(26) 注（19）参照　6頁
(27) 注（2）参照　392頁
(28) 『漱石全集』第五巻（岩波書店　昭41・4・23）『彼岸過迄』の引用は、全てこの本文に拠った。ルビは全て省略した。
(29) 注（3）参照　783頁
(30) 『漱石全集』第十五巻（岩波書店　昭42・2・18）208・209頁
(31) 注（19）参照　3頁
(32) 注（30）参照　264・265頁
(33) 同右　287頁
(34) 注（10）参照　114頁